

海外山歩き・旅行
氷ノ山&鳥取県

氷ノ山、樹氷のような燦爛とした輝き

鳥取砂丘・砂の美術館～氷ノ山～三徳山行者道～水木しげるロードの3泊4日

文-アン・ジュングク編集人 写真-メン・ホンヨン写真作家

旅に出るには旅先の行程をうまく組まないといけない。日程を組み間違えると時に旅は苦になる。地元の名所に精通する誰かが入念に組んでくれないと、味付けを間違えた料理のように辛くなるのだ。

日本鳥取県西側の米子空港で記者一行をお出迎えしてくれたのは、鳥取県観光戦略課国際交流員のペ・ジョンさん(29)。彼女は職場上司の坂田係長と数日間苦心して作ったという行程を差し出した。鳥取県の4大名峰のうち最東側にある氷ノ山(1,510m)を主とした3泊4日日程だ。

「まず東へ移動し、鳥取砂丘や砂の美術館、浦富海岸を見てもらってから、氷ノ山の山奥に入ります。途中、地元の有名な酒造に立ち寄り、帰り道には三徳山の行者道を取材して、最後に妖怪キャラクターの町、境港へのご案内致します。」

鳥取県は韓国との交流を念頭において、国際交流員が5人と、日本の47県のうち最も多い。一人もしくは皆無である他見比べると、鳥取県がどれほど日韓関係を大事にしているのか垣間見られる。東海を間にして向かい合っている江原道と鳥取県は今年で既に姉妹提携20周年になる。東草市と米子市など、江原道と鳥取県の自治体間姉妹提携数も全国で最も多い。2011年に本県の国際交流員に就いて以来、頻繁に県内名所を訪れていたペジョンさんのお勧め日程なんて、ケチのつけようもないだろう。

風の丘に日韓交流公園

海岸9号線を1時間余り走り、とある物静かな公園の駐車場にバスを停める。風の丘という小高い丘の上に日韓友好交流公園が造成されている。最近のギクシャクした日韓関係を振り返らせるくだけである。

韓国の船が風に追われてここまで漂流したことを象徴する石風車や石造物、東屋、それに満開したツツミなど、小奇麗に手入れされている公園の北側には韓国風の丹青をあしらった友好臺がある。ここに上がると涼しい海風と一緒に青い海の景色が広がる。公園案内板には公園の由来にハングル表記も添えている。

(訳注：写真説明)

氷ノ越に向かう杉の山道。ここはかつて鳥取住民が京都の伊勢神宮の参拝に通っていた道でもある。

「1819年、蔚珍郡・平海を就航した商船が嵐で難破し、赤碕沖に漂着した。鳥取藩主は安義基船長以下12名を手厚くもてなし、一行を無事本国へ生還させた。また、1963年には巨済島の漁船・成進号が琴浦沖に漂着。乗組員8人は町民の世話と募金等の援助で約1カ月間滞在し、船体の修理を終え無事帰国した。」

東屋に上がって韓国の船が漂流してきたという赤碕沖を眺めては、北西側の水平線越しのどこかにあるはずの江原道に向かって目を凝らしてみる。相手国が好きでないと答えた韓国人と日本人がそれぞれ80%、70%にも上るなんてことは残念でならない。

鳥取県は江原道のように海に面している面積が広いものの、東西に横長い。東部最高の山と町と言えば、氷ノ山(1,509m)と砂丘で有名な鳥取市。西部は大山(1,711m)と妖怪キャラクターで名を博している境港市だ。鳥取県最高峰の大山は眺めは良いが、急勾配の石階段が名高く、韓国の雪岳山に似た山だ。氷ノ山はこれとは正反対。昔、海の中にあったものが浮き上がってきたというのは、韓国平昌の高位平坦面地帯である仙子嶺と似通っている。「登山よりウォーキングのほうがブームという最近の韓国のトレンドにぴったりのコースだから」と、ペジョンさんは氷ノ山を今回の取材ポイントにした理由を説明した。

江原道と鳥取県は冬の積雪量が多いことでも似ている。私たちが登る鳥取東部の高峰・氷ノ山の線北斜面一帯は山陰地方、つまり山の陰にある地方と呼ばれる。東海を渡ってきた湿気た風が大山～氷ノ山が成す障壁を乗り越えず、甚だしい雪を降り注ぐのである。

(訳注：写真説明)

- 1 日韓友好交流公園の石風車。芝生とツツミが小奇麗に手入れしてある。
- 2 日韓友好公園に建てたれた友好亭(訳注：友好臺?)。海の眺めの良いところだ。
- 3 鳥取砂丘。広漠な砂の丘が海に接しており、独特な眺めと色々な体験が楽しめる。
- 4 鳥取砂丘の隣の砂の美術館。巨大で巧みな砂彫刻に驚く。
- 5 若桜町の仏教寺院。昔の富豪がご利益を祈願して建てたもの。

自然に取り戻してしまう数々の砂彫刻の傑作

午後の日差しに包まれた巨大砂丘の風情は格別なものがあると、ペジヨンさんは宿に向かう前に鳥取砂丘へ案内する。鳥取砂丘は浦富海岸と共に山陰海岸国立公園を成す重要スポットである。

砂丘もさながら、一行をさらに魅了させたのは砂丘の隣にある砂の美術館の砂彫刻だった。いや、正確には砂彫刻の限時性であった。ギリシャ神話の人物や大聖堂を巨大ながらも巧みに描写した世界各国の有名作家の砂彫刻は数千年保存してもいいはずなのに、4月から1月までのたった9ヶ月の展示が終わると、あっけなく自然に戻ってしまう。

展示場を見て外の展望台に出る。大自然の傑作として、果てしなく長い歳月の間、大洋の波と風が作り上げた鳥取砂丘の広漠な風景が広がる。巨大砂丘の誘惑に負けて、暑い日差しの中、砂の上を歩いた。幅2,4km、長さ16kmにも及ぶ砂丘の中に立ってみると、これは砂の丘でなく砂漠に近いものがある。

初日の疲れは十分癒すべきと、ペジヨンさんが取ってくれた初宿は、1200年の歴史を持つ岩井温泉の明石家旅館。400年前に建てられた本旅館は、80年前、火事に見舞われ建て直したものの、古き旅館の趣が隅々にある。

鳥取県の10余りの温泉郷の中でも、岩井温泉には昔の様子が一番くっきり残っているそうだ。鳥取県は西から東に進むにつれ、温泉の水温が徐々に高まるので、県最東にある岩井温泉は水温が断然高いという。

明石家旅館の羽衣室は最近流行っている言わばプールヴィラ(Pool Villa)だ。木の垣根をあしらった温泉付き部屋なのだ。「せっかくこんなに素晴らしい部屋に泊まれるというのに、コイツと一緒にか」と、思わずため息が出てしまうのはお互い様だった。

若桜町、昔ながらの通りと伝統酒の辨天娘

二日目。ペジヨンさんに県最高の海岸絶壁スポットという浦富海岸へ案内してもらった。まず遊覧船に乗って海蝕洞窟の中を体験したあと、丘の展望台にも上がってみる。浦富のシンボルでもある奇岩・千貫松島は、天辺に松の木を一本載せ、下方には穴が空いており、玉色の海を水盤とした盆石のように浮かび上がっている。

食事を終えて海辺を離れ、いよいよ氷ノ山に向かって内陸道路に差し掛かる。山奥の宿に向かう途中に立ち寄ったのは、氷ノ山の西斜面を管轄する若桜町。ここで一行は二つの魅力に心奪われてしまった。それは若桜町の昔ながらの通りと伝統酒造。

かつて若桜町は交通と林業の要地であり富豪も多かったという。富豪らは自宅の近くに蔵を造り、ご利益を祈願して寺院を建てた。今の通りの風情は昔とさほど変わらないという。若桜町を横切る大通りの北裏手にある蔵通りに差し掛かると、木島家住宅を始め、それと同じような大きさか、それより小さ目の日蓮宗・浄土真宗などの寺院、そして古き蔵が狭い道を挟んで物静かに立ち並んでいる。

人口は4,000人に及ばないらしく、若桜町の大通りに出ても人影は少ない。大通りの家屋は1.2mの軒幅で、軒を連ねている。これは大雪に備えて隣家との行き来を考えてのこと。まるで昔の日本映画のセットのような通りの西側には、鳥取県でも特に有名な銘酒という「辨天娘」を生産する太田酒造がある。こちらに立ち寄って種類別に試飲してみると、ほんのりと酔いが回ってきた。相場よりずっと安いというので、一本ずつ買い上げて再びバスに戻る。

鳥取県の銘酒 辨天娘

豪州にも知られている…4代目酒造

若桜町の太田酒造は、韓国で言えば昔ながらの田舎の醸造場のような雰囲気漂う。しかし、豪州のシドニーにもお得意さんがいるほど、品質の良い銘酒として名高い。とてもやさしい校長先生のような印象を持つ太田義人さん夫妻は4代目で100余年の伝統を引き継いでいる。

「地元の米と水で造ります。米を蒸すのも機械を使わず、昔ながらのやり方で手間をかけます。時間はかかりますが、そのお陰でお酒の味は守れます。こんなやり方なので数は限定されるわけですが」太田家は収穫が終わった直後の11月から翌年の3月にかけて、強力、玉栄など5種類の米で5種類の酒を別途造るという。太田さん夫妻に案内してもらった酒樽にはそれぞれ異なる米とその栽培者の名前が書き込まれていた。米の種類によってお得意さんが変わるという。

太田さんご夫妻(左)と熟成中の酒樽(右)

氷ノ山夏山開きの松明行列

本日の宿は氷ノ山の中腹、標高800mの高地帯に位置する氷太くん。現代風の外観を有する若桜町直営の宿泊施設である。畳部屋に温泉施設も整えているが、団体客が多いせいか、まるで韓国のユースホテルのようだ。ただ、ガラス張りの大型窓越しに広がる氷ノ山裾野の森の茂った稜線と溪谷の風景は久しく眺めていたいものだ。窓越しに見える棚田は「日本の棚田百選」にも認定されたそうだ。

その夕方、ペジヨンさんは一行を集合せた。本日5月31日は氷ノ山の夏山開き松明の日。ペジヨンさんは用意主導にこの日にちに合わせて日程を組んでくれたのだ。参加者たちが各々の松明を手にしている中、若桜町小林町長は祝辞に次ぎ氷ノ山夏山開きを宣言した。これを受けて人々は案内に従い、氷太くん周辺車道を約30分間歩き回り、行事は終わった。このような山開きは日本の数々の有名な山で毎年開かれる。

氷ノ山とは文字通り氷の山である。伝説によると、同山で一晩泊まった天照大神が、翌朝旭日に映える樹氷を見て、「ヒエの山」と称したというが、これが名前の由来となった。明治時代に「氷ノ山」と名が変わったものの、西日本では珍しく樹氷が見かけられる山であるだけにびつたりの命名である。冬は積雪のため入山ができないが、3月から11月までは登山シーズンだ。氷太くんの近くにある氷ノ山博物館で氷ノ山紹介映像を見せてもらったが、活葉樹林の紅葉色が杉の森の濃い緑と合わさり、秋の風景もまた凄かった。

6月1日、初夏の朝日の日差しがまぶしい氷太くん近くの広場には大勢の日本人が押しかけていた。今日をもって氷ノ山夏登山シーズンが幕を上げるのである。

くねくねとした道路を横切り、丸太のバンガロー村を通過して、野営場テント村を過ぎるとようやく登山口に差し掛かる(GRS座標N35° 21 31 E134° 29 44) 案内人がいないと登山口は見つかりにくいかも知れない。韓国人登山客のために、日本語とハングル併記の標識を昨年、設置しておいた。

日本のどの山にもありがちな杉の森の道が暫く続く。杉のような針葉樹は噴出すフィトンチッド量が多いことから、登山客も嫌がることはないはずだが、日本人はうんざりするという。春の花粉症が深刻であるうえに、木材の使い道が特にないから。日本は戦後森林緑化のため、杉を大々的に植えていた。

茶色の太い杉の中には、根元が裾野の方向へ弓のように丸く曲がっているものもある。毎年あまりの積雪に見舞われるせいで、こうして曲がって育つのである。山道は森が茂っており、勾配も緩やかなので子供たちも列に並んで登る。

氷ノ山には天然記念物として指定された日本最大の鳥類の犬鷲と、滅亡危機種の黒熊、イノシシ、日本鹿などの大型哺乳類が棲んでいる。特に熊は危険なので日本人登山客の多くはバックパックに小さな鈴をつけて登っている。今日のように大勢の人たちが登山する日は、熊も森奥のどこかで潜んでいるだろうが。

杉の木、ブナ林、すず竹の山

標高1,030m地点の小さな溪流で、今日の氷ノ山登山ガイドである自然保護監視員の田中さんは足をとめた。「上方の稜線とたった200mmの標高差なのに、これだけ豊かな水が湧水期にも流れているのはブナ林のお陰」と強調する。こういうブナ林に対する日本人の愛情は格別なもので「母の森」と呼ばれる。ブナは根っこが広がるので土砂崩れを防いでくれるし、豊富な落ち葉で水分を蓄積する天然ダムの役割をも果たす。戦後乱伐によってその多くが消えてしまったが、氷ノ山には未だ300haほど残っており、この森は西日本を代表するブナ森と指折り数えられている。

道には時に石階段が敷かれている。この石階段は1800年代中盤明治時代に敷かれたものだが、その遙かな前からこの氷ノ越は鳥取から若桜町を経て京都方面に向かう唯一の公式ルートの「いせまち通り(訳注：伊勢道?)」だった。若桜町に富豪が多かったのもこの道のお陰である。江戸時代(1603～1867年)、地元の庶民の間では、旅費を集めて三重県の伊勢神宮や、京都府の大江町にある本来の伊

勢神宮まで参拝に通う風習が流行っており、多くの人たちが氷ノ越を往来したという。

人々は旅の安全を祈願する意味合いを込めて、標識として多くの地蔵菩薩の石像を設置した。標高1,255m氷ノ越の頂に登ると、そのうち一つとして1843年に建立したという地蔵菩薩像が旅人を出迎える。

(訳注：写真説明)

- 1 氷ノ山中腹の広場に出た登山客。裏手に見える横長い建物は温泉付きの氷太くん。
- 2 スキースロープが通る下山路。周辺の杉の森が美しい。
- 3, 4 氷ノ山中腹のキャンプ場と丸太バンガロー。
- 5 氷ノ山の山道のオアシス、ブナ林。
- 6 氷ノ山稜の展望台、周辺のすず竹の海が眺望できる。

峠には雪が積もらないように尖った屋根の小さな避難小屋が一軒建てられている。避難小屋の隣の木陰で休憩して、日差しが照りつける稜線道についた。子供たちがおしゃべりしながら早足で通り過ぎていくと、白い埃が舞い上がった。遠くまで平地に近い平坦面で、目に見えるところは殆どすず竹群落。これはいっすず竹の海である。

この氷ノ山のすず竹の子の味は格別で「すずこ」と呼ばれる。昨日の夜晩餐会でお披露目した焼き竹の子だ。ガイドさんは一本取って皮をむいたあと、「生で食べてもいいですよ」と手渡す。この竹の子を専門的に採取する人たちは早朝に出て、太くて柔らかいものだけを選び取ってはすぐに下山するという。採集して時間があまり経ってしまうと、すずこが硬くなって味が落ちるので、早めに茹でておくために帰りを急ぐのだ。

氷ノ山は国定公園でありながら、すずこ採集にわりと寛大なのだが、それはすず竹群落があまりにも広範囲にわたって広がっているからだ。まるで、かつて海の中の海藻類が盛んであった様子を再現でもするかのように、氷ノ山は緩やかな稜線全体がすず竹で覆われている。氷ノ山が過去海の中にあったことは、所々で見つかるサザエや巻貝の化石が物語っている。韓国の東海岸地方が隆起するにつれて、ここ日本北部海岸地域も一緒に浮かび上がったのだろうか。

すず竹の海の真ん中には、時に小さな島ごとく杉の木やブナ群落が涼しい木陰を作ってくれている。このオアシスのような森の影のお陰で、氷ノ山主稜の照りつける日差しの中でもすず竹畑道を歩くことができた。サウナのあとに冷水を全身を浴びるような快感が登山客を迎える。しかし、暑すぎる真夏の登山は避けたほうがいいのかも知れない。氷ノ山は秋の紅葉が特に美しいことでも有名な山だ。

標高1,270m一帯のブナ原生林地帯の森の影で大木によりかかり休憩を取って頂上に向かう。すず竹の海の中に伸びている道は、稜線に沿って車も通れるほどの幅である。

すず竹の海の向こうに尖ったものが浮かんできたかと思ったら、暫くしてさっき見た頂のと似た頂上避難小屋が顔を出した。頂上避難小屋は広く、早足で我々より先に着いた小学生たちが中に席を取ってお弁当を食べていた。ここが頂上と言われなければ頂上であることに気付かないほど、氷ノ山の頂上の稜線は平らである。

標高1,510m頂上には小さいが気持ちを込めた祭壇が用意されている。いわば山開きの用意である。周りに人が多すぎたので、私たちはもう少し移動したところの木陰でお弁当を食べることにした。

避難小屋から100mほど離れている木製のトイレの2階は休憩室と展望台を兼ねている。そこに席を取ってお弁当を食べている人も数人した。

稜線で一人離れて育つ杉の木は、裾野にぎっしりと密生する数千本とは形が全く違う。モミの木やイブキのように自由に四方に枝を伸ばし、全体的に豊かで巍然とした身なりを整えている。そのお洒落な杉の木が集まってできた木影の中で車座になってお握りを食する。初夏のセミが騒々しい。

1.5kmほど歩いて次の展望台と避難小屋、トイレが出てくるまで、高度はほぼ保たれ標高1,400m代を維持していたが、再び茂ったブナ林が出ると、峠が急に下がっていく。危ないほど急勾配のところを過ぎると目の前の風景が広がった。スキー場のリフト終点だ。青い草原を成すスロープと両サイドの杉の森で、氷ノ山山麓は絵葉書のような美しい風景をお披露目する。そこで大きな木の下の広い木影に座り、溪谷を遡ってきたそよ風に涼んで下山した。

登山の豆知識

登山というよりはウォーキングコース

氷ノ山は標高1,510mと小さい山ではないが、登山はしやすい。スキースロープの最後の下りでは一部区間を除いて平地に近い道が続く。なので、スキースロープで登り氷ノ越から下ると下り道の危険

はほぼ完璧に避けられる。

主稜一帯はぎっしりとした巨大ブナ群落地だが、その中に道ができていたので迷う心配はない。ただ、頂上から東、そして1464m峰から南東側に県境の兵庫県行きの別れ道があるのでご注意を。1464m峰避難小屋を過ぎてトイレ兼展望台に向かう途中の三つ角(GRS座標 N35° 20 19 E134° 30 26)もその一つだが、ここから右側の道が出発点に戻る道である。

避難小屋は全て無人なのでおやつやお水などは十分に準備すること。トイレは頂上と主稜の南側の1464m峰にそれぞれ一つずつある。

氷太くん近くの駐車場を出発し、再び出発点に戻るまでの距離は約12kmなので6～7時間あれば十分だ。登山可能時期は3月末頃～11月中旬。降雪時期によって若干異なる。

(訳注：写真説明)

- 1 氷ノ山主稜を周ってスロープ途中の木陰で休憩する取材チーム。
- 2 氷ノ山主稜の南側の休憩所に集まった日韓両国民。
- 3 三徳山三仏寺の歴史を物語る杉の巨木。
- 4 三仏寺仏堂周辺。
- 5 三仏寺の行者道を登るためには登山靴または草鞋を買って履くこと

(訳注：写真説明)

- 1 三仏寺行者道の途中の枯死木に根を下ろした小さな木。
- 2 三仏寺・輪光院の精進料理。派手でもベジタリアンの献立。
- 3 三仏寺行者道の行く先にある投入堂。法師が仏堂をまるごと投入したという伝説が伝わる。
- 4 浦富海岸の奇岩群。
- 5 年間300万人が訪れる境港の妖怪町。

初夏でも汗だらけになって困ったが、昨日泊まった氷太くんには宿泊客限定の無料入浴があって、スリッパとビニール袋を提供してもらった。心身ともに爽やかになった一行はそれぞれ缶ビールを手にしてバスに乗っては、氷ノ山の強烈な暗緑色山稜と溪谷の風向を吟味した。

旅行&登山の豆知識

カーフェリーでいくオートキャンプ、氷ノ山中腹で自家用車を楽しめる。

東西に長い海岸地方の鳥取県氷ノ山の登山&旅行は、海辺に沿って移動し、時には山中に入っていくといった行程になる。県西部の米子空港を出発、日韓友好交流公園～三徳山行者道～鳥取砂丘・砂の美術館を見て岩井温泉郷1泊。翌日浦富海岸・若桜町の昔ながらの通り・酒造を見て、氷ノ山中腹にある氷太くんで1泊。翌日氷ノ山登山後に米子市皆生温泉郷に移動して1泊。その翌日妖怪の町を見て帰国する3泊4日をお勧めする。

鳥取県は日本北部なのでエアのほか、カーフェリーでも自家用車を持ち込めるというメリットがある。氷ノ山中腹の眺めのいいところや、国道9号線沿いにもオートキャンプ場が造成されているので、こういう施設を利用すると費用の節約につながる。キャンプ場の利用料は韓国とほぼ同じ。但し、船便は週1回の往復なので車を持ち込んで日本現地で過ごせる時間は1泊2日のみとなる。もしくは1週間まるまる滞在する手もある。鳥取県韓国語ホームページ tottori.co.kr

交通 仁川空港～米子空港(鳥取県西部)周3回(火・金・日曜日) アシアナ航空運行。1時間10分所要。往復航空料30万～40万ウォン。東海港～境港 週1回DBSクルーズフェリー(電話033-531-5611)往復運行。木曜日夕方6時東海港出発・金曜日午前9時境港到着。土曜日夕方7時境港出発。日曜日9時東海港到着。14時間所要。往復運賃一般席19万5,000ウォン

三徳山行者道から妖怪人形の町へ

既に十分満喫したところだが、まだ見所が残っていると、「お気に召したらいいですが」と言いながら、ベジヨンさんが翌日案内してくれたのは、日本の名勝・史跡国立公園である三徳山の三仏寺行者道。鳥取県の必見の場所として強くお勧めしたいほど印象深い所だった。

三徳山行者道は、韓国の智異山・実相寺から文殊庵につながる7寺院道のように、寺と庵をつなげる寺庵行者道である。しかし、時には、ロープを伝って登る急勾配の絶壁道に出くわしたり、木の根っこを掴まりまたそれを踏み台にして登ったりもする。滑落死も発生しており、お年寄りにとっては

恐怖と苦難の道のりである。それでも階段を設けずに昔の修行時代の道をそのまま保存してきたことが、三徳山を独特な名所にさせたわけだ。10月末には裸足で燃え上がる炎の上を歩いて祈願する火の祭典も開かれる。

三仏寺本堂から文殊堂～地蔵堂～鐘楼堂～納経堂～観音堂～元結掛堂～不動堂～投入堂に至るまでの8仏堂の行者道は往復約3kmの山道かつ岩道だ。ここに登るためには入場料を払って履物のチェックを受ける。途中の検査所で昔から巡礼者たちが履いていた固有のわらじを買って履くか、それとも引き返さなければならない。

根元にしめ縄が巻かれていたりする物凄い太さの千年杉の巨木が、石階段や仏堂周辺のあちこちに格好良くそびえ立っている。天台宗寺院の三仏寺は1,300余年前に修験道の行場として創建された。住職の息子さんとして全体の管理を受け持つ副住職の米田和尚によると、以前は下方の溪谷の滝でお決まりの修行を終えないと入山できなかったという。

行者道の仏堂は、絶壁洞窟の下、もしくは高い絶壁の上に支え台と一緒に建てられた木造建物だ。昔の行者にとって修行というより行楽ではなかったかと思えるほど眺めが良い。全ての仏堂に行者は住んでいない。

文殊堂や地蔵堂など見下ろすだけでくらくらとする絶壁の仏堂の縁側でも欄干がなく、怖がりの人はとうてい上がれない。鐘楼堂でカーンと鐘を一度鳴らし、幾つかの仏堂を過ぎていくと仏堂行者道の頂点である投入堂が出てきた。706年に当寺を創建した行者の役小角が、法力で絶壁の洞窟(訳注：窪み)の中に仏堂ごと投入したという伝説が伝わる。

三仏寺巡礼を終えて六根-眼・耳・鼻・舌・身体、そして心(耳鼻舌身意)を清めた一行は、巡礼者向けの3つの宿兼食事処のうち、一番大きい輪光院で精進料理を吟味した。派手で高級そうな献立は精進料理ではなく料亭料理のように見えるが、肉類はもちろん、ネギやニンニクも全く使っていないベジタリアン献立である。米田和尚が詳しい説明と一緒に精進料理をたらふく食べた一行はもう満腹状態。

そのまま宿に戻って休みたいところだが、「言うこと聞いてもらわないと、夕食もそばの大盛りにしちゃいますよ」と脅かし、ペジヨンさんは次の場所を案内する。というのは、一昨日の昼食に、一行の数人がグルメ気分で日本の田舎そばを「大盛り」で頼んだが、口に合わず、泣き泣きそばざるを空けたことがあったゆえだ。

境港市。人口3万4,000人の小さな町ながら、毎年300万人の観光客を呼び寄せている。小さい頃、お祖母さんから聞いた妖怪伝説を漫画にした地元出身漫画家水木しげるさんのお陰だ。全長800mの水木しげるロードには156の巧みな妖怪ブロンズ像が建てられ、妖怪の着包みの人が町のあちこでうろついている。妖怪バスや妖怪列車も通っている。日本の子供たちは主人公のゲゲゲの鬼太郎の着包みがやってくると、歓声を上げて我先にと一緒に記念写真をせがむ。

水木しげる記念館に立ち寄ってから、妖怪模様のパンを売っているパン屋さんでアイスクリームを手にし、鳥取県の3泊4日日程を終えた。席の向かい側の同行はアイスクリームにも妖怪が潜んでいないか念入りで見ている。日本は実に多彩な国だ。

インタビュー 鳥取県国際交流員のペジヨンさん

「韓国と日本のことを両方に知らせる仕事に遣り甲斐を感じる」

ペジヨン(29)さんは、村上春樹のエッセイを読んだことが切欠で、鳥取県国際交流員の仕事に就いたという韓国娘だ。春樹に引かれて日本文学を専攻し、2年間4年過程の単位を取ると学位がもらえる留学プログラムに応募し鳥取大学地域学科を修了した。韓国の慶州で外国人に文化財について説明するガイドさんに倣って観光通訳案内士の資格を取得したという彼女は、交流員の資格を十分整えていると言えよう。

国際交流員の仕事は韓国のメディアや旅行社を相手に鳥取県を広報すること。各種交流会の通訳・翻訳や、韓国文化を日本に紹介する仕事などがある。鳥取県の小学生や住民相手に韓国文化関連講義も開いており、こうした仕事に特に遣り甲斐を感じるという。

「日韓民間交流はより活発になるべきだと思います。政治的には葛藤もありますが、草の根レベルで仲良くやっていかないと将来、真の隣人になれないでしょう。日本の若者間で韓流は相変わらずすごくブームになっています。カラ、少女時代、東方神起はもちろん、最近はインフィニット、エーピンク、ガールズデイも流行っていますが、年寄りの記者さんはそういうアイドルのことは分かりませんよね？」